

建国期アメリカの政治・宗教・経済思想

研究内容

アメリカ合州国の「建国の父」の一人であり、文筆家・発明家としても著名で、アメリカ資本主義の形成にも深く関わった政治家・社会活動家ベンジャミン・フランクリンを中心に、建国期アメリカの政治思想を研究している。

ピューリタニズムなどの濃厚な宗教思想、その影響を受けた資本制経済形成期の経済思想と、独立革命を支えた政治思想との絡み合いが良く見える点で、建国期アメリカは思想史研究にとって重要な対象である。また共和主義、契約論、連邦論などヨーロッパ世界の政治思想の蓄積を踏まえた議論がなされている点も興味深い。

近年はフランクリンにおける「コモン・センス」的思考様式、独立革命の推進者として名高いトマス・ペインの政治思想との比較、連邦憲法制定の中核的論理を提供した『ザ・フェデラリスト』の憲法思想の研究などを平行して行っている。



地域・産学連携の可能性

地域社会の経済、宗教などに根差した政治活動を行い、社会を巻き込んで独立革命にまで至るフランクリンを中心とする社会改良活動は、現在のアメリカにおいても（日本とは比較にならないほどに）盛んな社会活動のひとつの原型といえる。これは地域における社会活動の在り方を理論的に検討するための材料ないし「モデル」となりうる。

このテーマに関連するSDGs開発目標



総合教育センター 政治思想（アメリカ政治思想）、政治理論、法理論

片山 文雄 KATAYAMA Fumio

教授、博士（法学）

執筆論文

コモン・センス、社会改良、政治権力——ベンジャミン・フランクリンの場合



Keyword

宗教と経済、宗教と政治、経済と政治、公共性、コモン・センス